

# 世界観と世界像

田邊 元

## 一 世界観と世界像との区別

世界観 Weltanschauung と世界像 Weltbild とは二つの語は、其慣用を離れ単に言葉の本来の意味のみから観て、果して本質的なる区別を其間に容易に認め得るものかどうか疑わしい。何となれば、世界が如何に観られるかと、それが如何なる像として現われるかとは、帰着する所殆ど同一なる如く思われるからである。併しながらよく考えると、観と像とは必ずしも全然同じとはいわれない。蓋し観といえ、その観られた世界の形姿のみでなくそれを観る主観の作用が同時に含意せられるけれども、像というのはそういう主観の作用から全然抽象せられた既成の形象を意味するを以てである。世界像は主観を離れて静的に存立する客観としての世界形象を意味するに對し、世界観は観る主観のはたらきを包含しそれを通して内から動的に世界が自己を開示する内容を意味すると考えられる。前者はそれに含まれるものとして自覚せられて居らず寧ろ世界の外に世界と對立するかの如くに仮定せられて居る所の主観に、映ずる世界の像であり、それに反し後者は、世界が自己自身を自己の内に映して観る結果である。或は之を世界像は直接なる世界の映像であり、世界観は自覺に媒介せられた世界の自己開示である、と云つてもよい。前者が単に存在を意味し後者が価値に係わ

るといふ如き區別も、亦其結果である。此様な區別が正に慣用上兩語の有する相違をも根拠附けるのである。世界観は久しく哲学に属するものとせられ、世界像は特殊科学に属するものと考えられるのは是に由る。世界観は勿論宗教芸術の如きものにも含まれるけれども、学問知識としては哲学に固有である。哲学は世界観の学といわれる。ところで哲学が科学に対し特有の地位を保つのは、それが科学の如く特定の公理を前提し、其公理の由来根拠は措いて問うことなく、ただ其公理の要請が承認せらるる限りに於て認識の体系を組織するのと異なり、所謂無仮定の立場に立つて科学の仮定する公理を反省批判し、それに由つて科学そのものを問題としてその根拠を自覚すると同時に、諸種科学の立場を綜合して統一なる世界観に到達しようとすることに依る。それに対し諸種の科学が夫々固有の公理を仮定して唯直接に其立場に映ずる世界の特殊の一面的なる像を構成する結果が所謂世界像に外ならない。世界像が科学の仮定的公理主義的立場に成立する直接の既成的静的世界映像たるに對し、世界観が斯かる世界像を成立せしむる主観の自己批判を通じ認識過程の動的自覚を媒介として、世界像の窮極的統一を目指す哲学に固有なることは、単に慣用に止まらざる意味を有するといわなければならぬ。約言すれば世界像は客観的であり世界観は主体的である。

斯かる意味に於ける世界像と世界観とは古代や中世に於ては相融合して、はつきり區別せられたとは言い難い。両者が明確に區別せられ、科学の世界像が哲学の世界観から独立して自律的なる地位を獲得したのは、いうまでもなく近世に於てである。ガリレイ・ニウトンの物理学的世界像が、充実した意味に於て世界像の代表となつたのは周知の通りである。而して一方に於て此自然科学の世界像は、古代希臘に於ける如く自己を拡大して同時に世界観の位置に立たんとするに對し、他方に於ては中世の宗教や神学の影響に由り、哲学が斯かる自然科学的世界像を超える神と靈魂との世界観を立てようとした。此処に世界観と世界像との分離は

極めて明白であると同時に、相互の勢力争を生じたのである。カントの批判哲学が両者の権限を明にし相互並存の関係を確立したことは其重要な結果であると言つてよい。其際科学といえはニウトン物理学を意味した如く、世界像も専ら物理学的世界像を意味したのは当然である。此傾向は、カントが厳密なる学としての性格を拒み、単に主観的意味反省の立場に属する目的論の原理を前提して立つと認めた所の生物学が、十九世紀に入つて独立なる地位を確認せられ、活潑なる研究の対象となつてからも、猶存続したのである。蓋しカント認識論の確立した如き機械論を生物学にまで拡張すれば、生命現象も物理的運動現象に還元せられることを其理想としなければならぬから、物理学的世界像の外に科学的世界像はあることが出来ない訳である。縦令十九世紀後半に至つて機械論の制限が自覚せられて生氣論の抬頭するに及んでも、元来生氣論は全自然の中に就き生体有機物にのみ所謂生命原理生命力を認めなければならぬと思惟するのであるから、世界の全体を生物学的に観るといふ世界像の立場に進むことはなく、従つて物理学的世界像が依然科学的世界像の代表であつたのである。それに対する生物学的世界像は猶十分広く承認せられるに至らなかつた。生物学者自身、生物学的世界像といふごとき概念に対し尻込みするところがあるのはその為と思われる。斯くて世界像は主として物理学的世界像の意味を有する傾向を今日に至るも猶免れない。所謂物理学主義 Physicalism は此傾向を表わすものであらう。

## 二 物理学主義と統一科学

今日明白に物理学主義を標榜し之に依つて所謂統一科学 Einheitswissenschaft の百科全書的体系を意図するのは、所謂ヴィーン学団 Wiener Kreis に属する Carnap, Neurath の如き人々である（但し、現在では Carnap

は Prag<sup>1)</sup>、Neurath は Haag<sup>2)</sup> 移り、Wiener Kreis<sup>3)</sup> のものは昨年 Schlick の凶死と共に事実上散乱した訳である。彼等は一方に於て、ヴィーンの伝統 Mach の実証主義を採つて、科学が或時或所に生起した出来事の経験を、直接に実証的事実のまま陳述する命題を内容とすることを強調する。しかし同時に此等の全然特殊なる命題は科学に於て互に矛盾無き首尾一貫の体系に統一せられなければならぬ。この首尾一貫性即ち無矛盾性或は自同性乃至同事反復性が所謂論理性である。斯くて科学は実証性と論理性との綜合を要件とする。所謂論理的経験論といひ経験的合理論といふ標語が此派によつて掲げられる所以である。さて此立場は生物学、心理学、社会学の如き他の科学を總て物理学に還元しようと思図するのではない。生命、意識、集団等の現象を物理現象に帰属するものとして總ての科学を物理学から演繹しようと思図する如きは、科学の自律の許さざる所である。物理学主義は実証的事実としての動かすべからざる出来事の特性を抹殺して一様に物理現象に還元する如き意図を有するのではないのである。唯此様に夫々異種の現象として特色附けられる所の現象も、空間的時間的出来事として個別的要素の位置を占め、それに就いての陳述が相互に矛盾無き首尾一貫せる公理的演繹体系に組織せられる論理が、如何なる経験科学に於ても互に同形 isomorph である所から、諸科学は内容上相異なるも形式上比論的類同を有すると認められる。そこに物理学の陳述形式たる数学的論理が、他の總ての科学に対してもその陳述形式たる役目を果たすべき理由があり、物理学の形態が總ての科学の模範形態となり、その論理が一切科学の陳述の表現を形式的に統一すべき所以があると考えられる。これが物理学主義と統一科学との意味である。従つて公理の内容の相違により諸種の科学が區別せられ、夫々の科学的世界像が成立はするけれども、その形式は總て同形的なる論理に統一せられ、而して此論理が学としての哲学の全内容を形造るのであつて、其外に諸種の科学的世界像を統一すべき世界観は無いとす。これ

はマッハの伝統、実証的精神の發揮たる非形而上学主義に外ならない。マッハ自身は此非形而上学主義の立場から、哲学の位置に、科学の發生を生理心理的乃至技術社会的に記述する広義の歴史研究を置いたと考えられるが、今日のヴィーン学団はそれを廢してマッハと異なる論理主義を採り、ライプニッツの伝統に従い一般科学として、科学の科学たる科学表現の論理を、哲学の位置に据えようとする。これ非形而上学的乃至反形而上学的科学主義に外ならない。斯くて何等か形而上学的傾向を含まざるを得ない哲學的世界觀なるものは、此立場に於ては認められぬことになる。

今世紀の初にマッハの実証主義に対し實在論的世界觀の立場から、物理学的世界像が實証的經驗を超ゆる實在の映写として漸次に歸一すべき所以を力説したのは、いうまでもなくPlanckである。マッハが實証主義の立場から理論を以て實証的經驗の思惟經濟的なる概括と看做し、斯かる實用主義の結果として理論の仮説性、規約性、不定性、多元性を説いたのに対し、プランクは理論の實在的意味を強調して、その当然に歸すべきことを主張したのである。ところでその所謂物理学的世界像の統一の主張は、之をその形而上学的背景たる實在論から引離して考えれば、想うに次の如き論理に依るのである。即ち、實証的經驗が若し有限なるものであるならば、成程之を統一する一般理論の体系も多様に考え得る訳である。所謂仮説の多様は其限り否定することが出来ない、併し經驗は無限である、實証的事実は無限に増加する、従つて斯様に無限なる事實を統一する理論は、漸次制限せられて不定多様を許すものでなくなり、終局に於て歸一しなければならぬこと、恰も曲線を描くに、その通過すべき点が有限であれば曲線は一義的に決定せられないけれども、若し点が無限に増加すれば曲線も終に一義的に定まる、と考えられる如くである。これが所謂物理学的世界像統一の論理と解せられる。元來實在の映写というも、我々は經驗と理論との統一を外にして實在を直接に

認識する途を有しないのであるから、批判的にいうならば、寧ろ世界像統一の斯かる論理が、経験的事実と数学的演繹との統一としての合理的実在を保証するというべきであろう。プランクが現実の経験に量子論的不定性が成立するも、なお思想実験的に理念として数学的精密関係が成立し、これが実在を支配すると考えて、物理学が世界観獲得の武器たり得ることを極力主張しようとしたのは其為と思われる (Planck, Die Physik im Kampf um die Weltanschauung, 1935)。彼の世界観は、物理学的世界像を成立せしめる数学的理性の支配する實在論 (理性的實在論) に外ならない。併し彼が新しき危機に臨める斯学の状勢に直面して、猶古き立場を維持せんが為に、如何なる混乱と昏迷とに陥って居るかは、此比較的新しき講演を読む我々の容易に氣附く所でなければならぬ。其処には実に量子論の創説者が、却て量子論に徹底し得ないという痛ましき矛盾が示されて居る。而して其禍根となったのは、正に数学の要素的連続論と物理学の非連続論との間に起る乖離に外ならない。周知の通り十九世紀の解析数学は、連続を秩序的点要素の集合に帰する思想に依って立つ。Cantor, Dedekind の実数連続論は此古典的集合論の中核である。而して今述べた経験事実の無限が物理学の理論を統一に帰せしめるといふ主張にも、此数学思想が根柢に存することはいうまでもない。併し此様な連続集合論の思想が、新量子論の不確定性原理と相容れないものであることは、プランクが前者の要求に強いられて要素的因果律に固執し、新しき統計力学の意義を無視して、古き要素的見地を理念として観念論的に維持しようとした跡が明示して居る。ところで彼の反対したマツハの思想を論理主義と結合しようとする今日のヴィーン学団の論理も、正にプランクのそれと同様の古典集合論的分析論理に外ならないのである。然るに実験的経験は、単に集合の要素として一般概念の外延を形造るものと考えられ理論の普遍に対する単なる特殊として思惟せられるだけで存在する出来事という意味を有するものでないことは、新量子論の示す所で

ある。それは単に自己同一の単純要素と思惟することを許さない。反対に自己否定的全体性的統一なのである。それが偶然性を含むと考えられるのも其為に外ならない。一般に実証性は論理性に對し、後者の普遍に對する単なる特殊として必然的に規定せられるものでない。兩者の綜合は分析論理の包摂關係によつて行われるのではない。交互否定的なるものの絶対否定的綜合としてのみ可能なのである。従つて論理を形式として現実的内容から抽離すれば、最早それは現実的領域を規定する實在の論理ではなくなる。之を陳述形式にのみ係わる表現形式論とするも、実は表現が却て内容と交互相媒介するのであるから、決して如何なる領域にも共通なる論理として統一科学に組織せられるものではない。各領域はそれに固有の論理を有し、夫々の段階に於ける経験の論理化たるのである。論理と直観とは具体的には常に相即する。此事は今日の数学に於ても認められ、分析論理の抽象に支配せられる上述の古典集合論は廢棄せられた。論理主義はもとより形式主義も批判せられて、直観主義の数学基礎論が抬頭しつつあるのである。我々は点的要素を集めて如何に高度に無限ならしむるも、決して整序的なる要素集合として連続を再構成することは出来ない。連続は其自身斯かる整序を許さないで、却て一の整序系列を自己から發展せしめると共にまた之を否定し、之と矛盾する他の整序系列をいくらでも多く發展せしめることの出来る生成の媒質に外ならないというのが、直観主義の連続論である。これは連続論であるけれども、同時に点的要素論を否定する限り却て物理学の量子論と調和せられる。何となれば、それは全体主義に於て量子論的統一の見地と一致する所があるからである。量子論は一方に於て量子力学の非連続論を發展せしめたと同時に、他方に於て確率論を媒介として波動力学の連続論を成立せしめたことを顧みるならば、直観主義の連続論が量子論と調和する所以は觀取するに難くないであろう。不確定性は正に直観主義の意味に於ける連続の生成媒質の構造に相当するものと思われる。斯くて

物理学に於て要素的見地（此が機械論の立場である）が否定せられて、全体的見地が統計力学に採用せられるのと並行して、数学に於ても直観主義の基礎論は同じ傾向を示すといわれるであろう。然るに此様な傾向を無視して、飽迄要素主義の分析論理を徹底しようとするのがヴィーン学団の論理である。それは實に Russell の型論 Theory of Types に展開せられた分析論理を襲用するどころではなく、更に之に一步を進めたといわれ *Dr. Wittgenstein* の Tractatus Logico-Philosophicus の主張に従い、論理を總て自同命題に還元し、所謂同事反復に窮極せしめようとするものである。従つてそれは其標榜に反し、Hilbert の公理主義と異なり、数学固有の直観を論理の外に認めることなく論理に数学を還元しようとする論理主義となる。既にヒルバートの公理主義形式主義さえも、その立場の証明論がその証明公式を証明論に依つて証明しなければならぬという事情のために、脱却する能わざる循環論に陥ることが豫想せられる。成程自然数に関し公理主義は徹底せられるし、更に有理数に就いても其事は可能であろう。しかし連続が上記の如く矛盾の統一に成立する生成媒質であるならば、実数の連続体は到底公理化し盡すことが出来る筈が無い。証明論の含む循環性が循環でない為には、証明論の証明する証明公式と、その証明に方法として使用せられる証明論とは相異なるものであり、方法としての証明論は非公理的でなければならぬ。併し若し仮にそうであつたとしたならば、証明論が証明論を証明したことはない故、証明論は自己分裂に陥り不可能となる。ここに自己反省の矛盾があり、自己反省を原理とする所の無限の含む矛盾性がある。連続は此矛盾の統一の全体に外ならない。それは矛盾の循環的統一の母体である。方法としての証明を記号公式の体系としての証明に化することを意図するのが、公理主義証明論の特色であるけれども、これは矛盾律に支配せられる分析論理の能くする所ではないと思う。ラッセルの論理主義を超出して論理と数学との関係を論理主義の反対に転じた形式主義といえども、前者と同様に



分析論理の束縛を脱しないのである。ヴィーン学団の論理が仮令その標榜する如くヒルバートの形式主義に一致するとしても、尚それは分析的見地の結果として到底存在の領域を体系化する能わざるものである。形式主義の解する如くに、存在が無矛盾と同意味であり、存在する対象が自同的要素の結合に止まるといふのは、現代の物理学の否定した要素の見地に外なるまい。物理学の方法たる数学は形式主義の数学でなく直観主義の数学でなければならぬのではないか。それは要素の結合集積として全体の構成を理解し盡さんとするものでなく、要素は常に全体に規制せられ、全体の規制を離れては不定混沌に陥る、その全体の規制のもとに於ける要素の相互関係が所謂構造として分析せられる、という見地に立つのでなければならぬ。物理学自身が今日は機械論の意味に於ける物理学主義を否定して、これを遙に超出するといわなければならぬであろう。

### 三 生物学主義と綜合科学

今日「生物学者の哲学」をもつて科学と哲学との聯関に独自の見解を示す生理学の Haldane は、相対性論から新量子論に至る新物理学が、新に觀察せられた事実の記述において古き物理学の機械論に固有なる、空間、時間、物体、運動、作用、反作用の如き言葉を用いることが出来なくなった結果、適當なる言葉を求めて生物学に赴くほか無いであろうといふことを言つて居る (Haldane, *The Philosophy of a Biologist*, p. 24)。これは一見甚だ奇矯に聞えるけれども、前節の終に述べたごとき全体の規制を俟つて始めて成立する構造の概念を顧みるならば、それが明白に全体的統制の維持を特色とする生命現象の構造と一に歸することを認めなければならぬ筈である。構造 Struktur の概念は本来機械論要素論に属するものでなく、生体論全体論に固有なるものである。物理学者 Jordan は近著 *Anschauliche Quantentheorie* (1936) に於て、量子構造と生体構造との

比論から、新物理学が生命認識の媒介たり得る希望あることを主張した。彼に拠れば巨視物理学は生物学の方法として不十分であるけれども、原子物理学は本質的にそれに関係をもつ、加之しかのみならず此様な原子物理学の微細生理現象への応用ということを離れても、前者の相互補足性論は新自然科学的思惟形式の実例として生物学に對し重要な意味を有する(5. 272-273; 293)。マッハの実証主義を継承し理論の解釈に實用主義的思惟經濟説を採る彼が、却てマッハの感覺要素論を棄てて體驗の全体性を主張し、先科学的經驗の全体性的概念を豫想して、一方ではそれに新しき複雑なる概念構成を加えて先科学的世界像を補正し發展せしめ、他方では反省的に益々深く其根本概念を分析するのが科学の業である、と主張したのは、寧ろ結果に於て実証主義を超えるものといふべきであろう。彼がヒルバートの方法を模範として居るのも其証左とせられる(272-279)。生物学に於ける機械論を排して目的論を認め、不可分的生体の全体性は微分方程式でなく積分方程式を生物学の法則に要求すると主張し、生体に於ける記憶の維持は時間的にも積分法則を必要とすると説いて(287-282)、更に具体的に生物現象の実際につき其意味を解釈したのは(293-301)、新物理学の方法論が生物学の固有性を傷つけることなくそれに役立つ事を示す為であろう。勿論もちろん彼は今日の物理学が、生物学の法則を余す所無く物理学の法則に還元することが出来るのではないと明言して居る(293)。併ししか将来に於ては両者が合一して、無機的現象と其法則とは、有機的現象と其法則との単純化せられた極限に歸し、積分的全体性が極小となった場合に相当するであろう。従つて生物学的法則の方が包括的一般的と認められる、と言つて居るのは(301-302)、謂わば物理学的方法の生物学化を語るものでなければならぬ。彼が更に生物現象は内から心理現象として意識せられると説き、而してして此内と外、觀察作用としての主観と対象としての客観との不可分性が、所謂いわゆる他相互補足の關係にあるものとして、単なる一方的觀察が實在の全体を盡すつく能わず、勿論もちろん相互補足の關係に

ある一方面が観察の対象となる限り、観察作用の干与は他の補足面に属するから対象の法則はそれが為に精密性を失うことはなく、従つて対象の一義的構成が損われることはないけれども、併し対象の構成のみを以て實在全体の模写とする能<sup>あた</sup>わざる限り、主観客観の限界が消滅して両者の中間階層が認められ、斯<sup>か</sup>かる統一的直接体験が最も広き認識地盤として、その構造を明にする心理学を包括的なる科学と認めしめる、物理学は其狭小なる一部に帰する、というに至つて(309-318)、紛れもなき唯心論的世界観を提出して居る。これは前述のホルデーンの主張する生物学的哲学と殆<sup>ほとん</sup>ど軌を一にするといわれるであらう。勿論一方は物理学から出で他方は生物学から出た相違の為に、生物学の積極的解明は後者の特長をなすけれども、全体の傾向は共に生物学主義 Biologism に基く唯心論的世界観の哲学に帰着する。特にホルデーンの場合には哲学を積極的に標榜し、其体系を完結させる為に、物理学、生物学、心理学の上に、直接体験せられる知覚世界を最も深く最適具体的に解釈するものとして宗教を置き、超個人的理想的人格としての神に全体が包容せられ、世界は神性の不断なる自己開示の発展過程と解するのである。彼が従来の物理学主義を以て唯物論を将来するものとし、それが實在と機械的物質とを同一視する結果、神と精神とをして存在する余地無からしめると攻撃し、無神論不可知論から意識論現象論生命偶発論に至るまで、總て此顛倒錯誤の産物たる事を主張した根拠は(136-153)、生物学主義の優越に存するのである。ラッセルと共に Principia Mathematica の大業を成し、後特殊相対性原理に基く自然哲学を経て所謂生体哲学を組織した Whitehead の如<sup>ごと</sup>きも、また同じ方向に属する。彼は、生物学は大なる生体の研究であり、物理学は小なる生体の研究である、と説明して居る(Science and the Modern World, p. 145)。更に所謂綜合科学と呼ばれるものも、物理学主義が論理の同形性に基き統一科学を主張した如く、生物学主義が物理学をも生物学に綜合包括せられると考える意味に於て、生物学を中心とす

る科学の綜合を意図するものと解せられる、心理学は生物学と内外表裏をなすものとして同じ中心に綜合せられ、同時にその全体に唯心論的色彩を賦与する。斯くて所謂綜合科学は特殊の科学的世界像を超えて統一的世界觀たらんとするもの如くである。

ホルデーが生理学者としての研究に導かれ、呼吸や視覚の実験的研究の結果に基き、生物と環境との整合的統一、その統一の表現的全体の構造、を明確に把握し、生物の環境が決して単にそれと無縁独立なる物理界でないことを明にし、環境と生物とは不可分なる統一的全体を形造り、その整合統制的なる統一を維持する過程が生命に外ならないとするのは、思うに正当なる見解といふべきであろう。彼が徹底的に機械論と生氣論とを斥け、偶発的進化、附帶的副現象の如き折中概念を排して、整合的統一の維持を生物学の公理としたことは(Haldane, The Philosophical Basis of Biology, p.31)、卓見であるといわなければなるまい。ホルデーの反論にも拘らず彼を方法的生氣論者と評して、反対に彼の斥ける偶発的進化説を採るWarden等の生体論者(小野・丘、生物、心理学概論 27:36)は、前者の批判する如く猶その自ら排する物理学主義に拘われる所が無いとはいわれないようである。その個性的自己調節体系なる生体の規定は、所詮全体の統一を豫想し、その主張する環境の力学説は当然環境生体の整合統一を要求するであろう。併し彼等生体論者が科学的研究に於て目的論的全体の規制よりも体系構制の力学的分析を重要視するのは必ずしも理由無きことではない。此処にホルデーの全体と細部の説や、物理学を以て生物学の全体性を極小にした極限であると主張するヨルダンの見解の、猶考すべき問題を含む点がありはしないかと思われる。即ち此様な見解は所謂全体主義に偏して要素的見地を抑えるに過ぎはしないかという疑問である。要素的見地の従来独り優勢を恣にしたことに対する反動として、全体主義は強調せらるべき理由を十分に有すること否定出来ないが、併し要素は全体に

相関的であり全体に規制せられると共に、それは論理の要求上全体に対して自立性を有することが認められなければならないであろう。従つて全体は豫め動かすことの出来ない不可分的統一として前提せられるのである。要素分析が経験の実証的事実と相容れない矛盾に出会う限りに於て、其矛盾を止揚する全体的統一として仮説的に定立せられるのでなければならない。其限りそれは単に与えられたものでなく求められるべきものである。要素が全体に規制せられると同時に、全体が要素に媒介せられるのである。量子論の發展過程は正に之に対する範を示す。苟も全体性を豫め内容的に不動なるものとして一方的規制の原理に掲げることが科学的でない。体験の実証性は常に全体性を伴うが、科学の論理性は要素分析の徹底を要求する。具体的なる科学的認識は此二つの要求の対立的統一でなければならぬ。全体性と要素性とは何れの一が他を抑圧すべきでもなく、対立的に綜合せられなければならない。生体主義の主張は其限り正当さを有する。その所謂構制水準の偶発的進化は、客観的存在の変化としてでなく、方法論的二律背反の綜合過程として、意味を有すると解すべきであろう。直観主義の数学基礎論もその公理的建設に於ては形式主義と結果を同じくする途を履みながら、苟も論理を直観から遊離せしめず常に直観に於ける構成と要素の分析再建とを相即せしめ、兩者の対決に於て二律背反を規制し、直観と論理との交互的なる制約の循環的統一なる發展を数学の立場とするのである。此矛盾を媒介にして發展する循環的統一の構造が物理学と生物学との間にも存し、又生物学と心理学との間にも存しなければならない。心理学が意志的主体の意識的行動の学であるならば、それは単に形態説の考うる如く場の力学 Felddynamik に止まることは出来ぬ。主体の自立性は力学的連続観のみからは認識せられない非連続性だからである。形態説は要素説を斥ける結果連続全体論に傾き過ぎて、非連続的個体の自立性を見失う危険がある。これも心理学が生物学に対し、矛盾否定を媒介にして環境に対する主体

の自立性を確立することに着眼しない為ではないか。一般に高次の科学の世界像と低次の科学の世界像とは、ただ拡大と制限という意味に於て同形態なる構造の発展段階の相違を有するのみではない。その間には自立的なるものの否定的媒介関係が必要である。然るに生物学主義乃至所謂綜合科学は此辯証法的綜合の意味を十分に發揮しないようである。何となれば生命は此様な要素の自立性を主張することに其本質を有するのでなく、直接なる全体の統一を主とするものだからである。その結果は各種の世界像が自立性を失つて所謂綜合科学的的世界観に解消せられる危険がある。併し此様な全体に於ける要素の自立は、実は社会科学の立場に至り社会に於ける人格の自立に於て始めて具体性を發揮するのである。ホルデーが心理学の対象とする人格は、眞実には斯かる社会的自覚主体でなければならぬ。人格の共同社会は生物の環境と同一ではない。然るに彼は此様な社会的主体の自覚を単に生物的行動の意識と同一視し、単なる個人の相互関係を以て理解する能わざる社会の全体性と、それに於ける人格の自立性とを、はつきり認めることをしない。其結果は却て社会の原子論的観方に支配せられ、其全体性を見失う。彼が人格の全体的統一者として神の普遍人格を宗教の立場に於て掲げ出さなければならなかつたのは其為である。生物学的世界像は心理学に止まらず更に社会科学の世界像をそれより高次なるものとして要求しなければならぬ。それに対しては生物学も心理学も契機の位置に止揚せられなければならぬと同時に、かえつて旧物理学特有の機械論さえも、社会の物質的契機として認められるべき意味を保有しなければならない。

#### 四 世界像と世界観との関係

世界像の模範と考えられた物理学的世界像の實在論的統一も、先ず相対性論に動揺せしめられ更に新量子論

によつて根柢を奪われた。プランクの要求した如き人間性からの完全なる離脱は、其結果として当然制限を受けざるを得ない。物理学的世界像はそれ自身に完結した實在の模写ではなくして、その觀察作用自身を補足面に豫想する自己否定的循環的なる動的体系たる外無い。其統一は動的自己内還歸の生的統一たることが、ヨルダンの如き新鋭の物理学者の自覚に現われたものと思われる。それがホルデー等の生物学主義と軌を一にする所以である。併し生物学的世界像も却て個体の自覚に於てその統一を破る裂目を有すること、前節に述べた如くである。全体と個体との対立的統一は、生物に於ては個体がその生死を超える生命の流れに融解せられる結果十分に發揮せられない。其關係は社会科学に於ける国家と個人との対立的統一に、始めて具體的なる地盤を見出すであろう。国家は単に自然的に存在する民族的生命共同体でもなく、又個人の契約によつて成立する結合社会でもない。両者が媒介せられて、民族の伝統が国民總意の表現に転化せられ、個人がそれに於て自己の自由と犠牲とを相互媒介せしむる如き相對即絶對的なる全体である。個人はそれに於て自覺的に自己の自由を実現する媒介をもつ。国家は個人と対立し或は個人を否定し吞盡す如き對象的存在でなく、個人の自覺的なる存在の媒介であると同時に、個人の実践を通して實現せられる主体的全体である。ホルデーの強調する生物と環境との整合統一が自覺的に実践を通して、主体と基体との統一として實現せられる結果が国家であるといわれる。他の社会形態が或は国家の媒介契機として或はその分裂疎外態として理解せられるのも其為に外ならない。社会科学は具体的には国家的諸科学とならなければならぬ。之を階級科学に限るのは抽象的といわざるを得ない。階級の対立は疎外的關係であるとし、其止揚が直ちに個人の自由なる人類的結合であると思惟するのは、なお旧物理学の要素的見地を完全には脱却しない抽象觀である。それに対し国民の直接的自然的統一を直ちに国家の構成原理とする国民主義の非科学的非合理主義が、対立物と

して現われるのも已むを得ない。ただ現実の歴史的民族社会を基体として実践的に個人の主体化に依り実現せられる国家の統一のみ、具体的なる全体と個体との相即を合理的に成立せしめるであろう。然るに此様な対立的統一は新物理学が示したような単に所謂排他的相互補足の関係に止まることは出来ない。それは主体の実践に於て具体的に成立するものでなければならぬ。斯かる実践の媒介が社会科学の明白なる特色を形造る。新物理学の観察作用に現われた排他的相互補足の関係は、社会科学に於て其認識自身の内容を成すのである。今や主体の行動が科学的認識の隠された補足面としてでなくして相関的なる契機となり、認識は実践との相関に於てのみ成立するものとなる。社会は主観客観の合一であり、その制度は他者的存在にして同時に自己の所為なる機構的統一である。生命の特色と考えらるる環境と生体との整合統一は国家社会に於て完全なる自覚に達する。従つて社会科学の世界像は此様な主観の行為そのものを契機として含むに由り、最初に區別した意味に於て当然世界像に止まらず同時に世界觀に發展しなければならぬ。世界觀は新物理学に於て否定せられた世界像の完結の裂目を充たすものとして、既に物理学的世界像に於てさえもそれとの聯関を示すのであるが、社会科学に於ては今や世界像と世界觀とは相互不可分離なる統一を成す。但し其統一は勿論統一せられる契機の自立と相互の対立とを含意しなければならぬから、其限りなお相互補足的に對立の統一を成す筈である。若し之を無視して世界觀の優勢が世界像の自立性を破壊するに至るならば、政治が科学の獨立を損い実践の非合理性が理論の合理性を毀つことになる。これは併し却て実践の昏迷と政治の混乱とを結果することというまでもあるまい。世界觀は世界像の自立性を重んじ、ただ後者の自己充足的徹底が却てその二律背反的自己否定に陥ることを媒介として、それに対する絶対否定に於て成立するのでなければならぬ。従つて世界觀の最後の原理たる実践の根柢は、何等か直接態のまま、科学の理論と媒介せられず其世界像と



没交渉に謂わば上から之を統制せんとする神学的原理であることは許されない。ホルデーンの哲学が伝統的宗教の人格神論に終つて居る如きは科学者の世界観として徹底したものとは思われない。存在としての有の認識は科学の世界像の外にあるべきではない。絶対的なる実践の原理は有でなく無の絶対否定態でなければならぬ。科学の二律背反的自己否定的構造を十分に徹見した科学者は、一般に科学的世界像が体系の階層的發展を通じて最後に実践と相即せる社会科学の世界像に達し、而してその社会科学の理論そのものの自己否定性が実践の絶対否定的構造に対する媒介なることに、世界観の原理を認得しなければならぬ。実践の原理は科学理論の外に立つて上からはたらく有の原理でなく、科学理論が徹底せられる極、却て自己否定に陥る所の理論の二律背反性の底から絶対否定的にはたらく無の原理でなければならぬ。それが總ての相対的なるものを殺すことに於て生かす絶対の顯現に外ならない。歴史は其顯現の跡を示す。科学は実践と相即するに従い歴史的となる。社会科学が歴史的とならなければならぬ所以である。歴史は単なる有でなく無の有化である。斯かる無の原理のみ完全に科学の自立性を容れて而も之を超えることが出来るであらう。此様な意味に於て無を行ずる実践に至つて始めて世界観の立場が確立せられる。それは徹底的に科学の世界像を媒介として而も之を超え、それ等の諸段階の科学的の世界像を其内に於て位置附けるものである。若し此兩者の対立が実践に於て絶対否定的に統一せられることを無視して、世界観と世界像とを混同しようとするならば、其結果は科学の自主性自律性の破壊と独断的形而上学の發生以外の何ものでもないであらう。今日の唯心論的国民主義と唯物論的階級主義とが共に斯かる危険を包蔵することは蔽い難い。それは科学の廢頽、思想の貧困を招き、却て国運を衰退に導くことを免れない。真に国家と科学とを愛する者の警戒すべき点である。

- 『哲学と科学との間』（岩波書店、一九三九年一月第五刷）所収。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には`LATEX2ε`でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。